
英語コミュニケーションコースのためのオンライン環境取組

- ICTによりグローバルコミュニケーション力を育成するために -

研究代表者 ホワイト ショーン (経営学部)
 共同研究者 ロザーティ サイモン (経済学部)

概要

国際化が進む中で、現在グローバル社会の協力等を通じて世界の諸問題を解決するために、外国語によるコミュニケーション力や異文化理解が不可欠となっている。外国語能力及び異文化理解の向上のためには、基礎的な学習の上に、実践的なコミュニケーション活動や異文化体験として特に留学が勧められているが、これは全般として、体験とコミュニケーション実践の必要性を物語っている。しかし、現在の諸事情を見ると、幾つかの問題点が見えてくる。

- ・ 平成 25 年度法務省の発表によると、2012 年に日本の総人口の 1.60%が外国籍か外国生まれの日本国籍取得者であった（近年の同結果：2011 年 1.63%；2010 年 1.68%；2009 年 1.74%。何れも減少傾向）。
- ・ JASSO 及び文部科学省のデータによると、2012 年に日本の高等教育機関において勉強・研究している留学生の数は 137,756 人、日本人学生も含めて全国の学生の約 4.6%であった（2011 年：138,075 人、4.5%）。これは、10～20 年に比べて増加傾向となっており、当然諸事情も違うが、他の仲間の国に比べ、まだ最低ランクと言える。
- ・ 同じく、JASSO 及び文部科学省のデータによると、2013 年の日本人派遣留学生数の 43,009 人は、前年 2012 年の 36,656 人に比べて大きく増加しているというものの（北米への減少に対してアジアなどの地域への派遣増加 傾向になっている）、全国の学生のたった 1.5%程度であった。
- ・ 外国語教育の問題も少なくないことは周知の通りである。

以上のような事情を踏まえ、異文化の人と接する機会がまれであり、外国語によるコミュニケーション機会が少ないことは明らかである。本学の場合、2013 年度において 494 名の学生が何らかの留学を行い、全学生の 2.6%程度となった。これに対して、毎年約 150～200 人が所属する学部共通英語コミュニケーションコースの近年の短期・長期等の留学率は次の通りである。

- ・ 2009 年度：19%
- ・ 2010 年度：14%
- ・ 2011 年度：12%
- ・ 2012 年度：19%
- ・ 2013 年度：15%（23 名）

本 2013 年度のコース所属派遣留学生数の内訳が次の通りである。

- ・ 交換留学：5 名
 - ・ 私費留学：2 名
 - ・ BIE プログラム（セメスター）：6 名
 - ・ BIE プログラム（5 週間）：1 名
 - ・ 海外研修：9 名
- 合計：23 名

この数字は、全国及び龍谷大学の平均より数倍高く、決して悪い結果とは言えないが、コースの大部分が留学をしておらず、そのレベルの語学及び異文化理解の教育効果が得られていないと思われる。

本取組は、特に世界を瞬時に結び付けている ICT の使用により、留学以外の活動を通じて、英語によるコミュニケーション実践と異文化理解体験を英語コミュニケーションコースの学生に施すことと、学生にこれらの経験により、学習及び留学しようという動機を高めることとする。

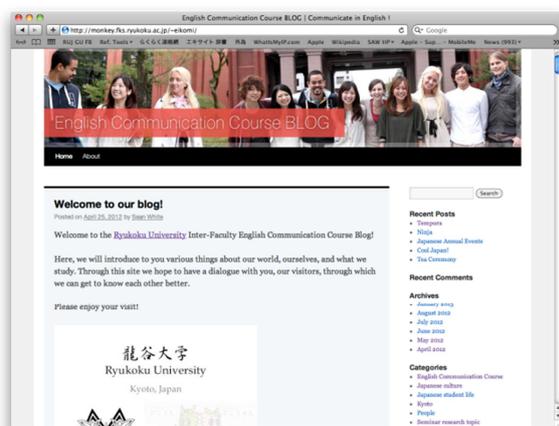
取組の狙いと内容

以上の目標を踏まえ、本コースの学生にコミュニケーション実践と異文化体験の場を ICT 等により提供するために、3つの活動に継続的に取り組むことにした。

(1) 2011 年度 作成コース用ブログ及び Facebook と Twitter のページの活用と継続的な点検等。

(2) 2012 年度作成英語コミュニケーションコースオリジナルサイト（コース学生への情報提供、コース及び学内外の PR のため）の活用と点検等。

(3) 2012 年度から開講している学部共通特別講義 I において、Global Partners in Education（米国イーストカロライナ大学本拠）のメンバー大学が実施している Global Understanding 共同授業（学生間の英語でのビデオディスカッションやパソコンチャットによる異文化理解授業）の継続参加、教育効果等の測定と分析。



学生・授業用ブログ



Facebook と Twitter を埋め込む
コース用のオリジナルサイト

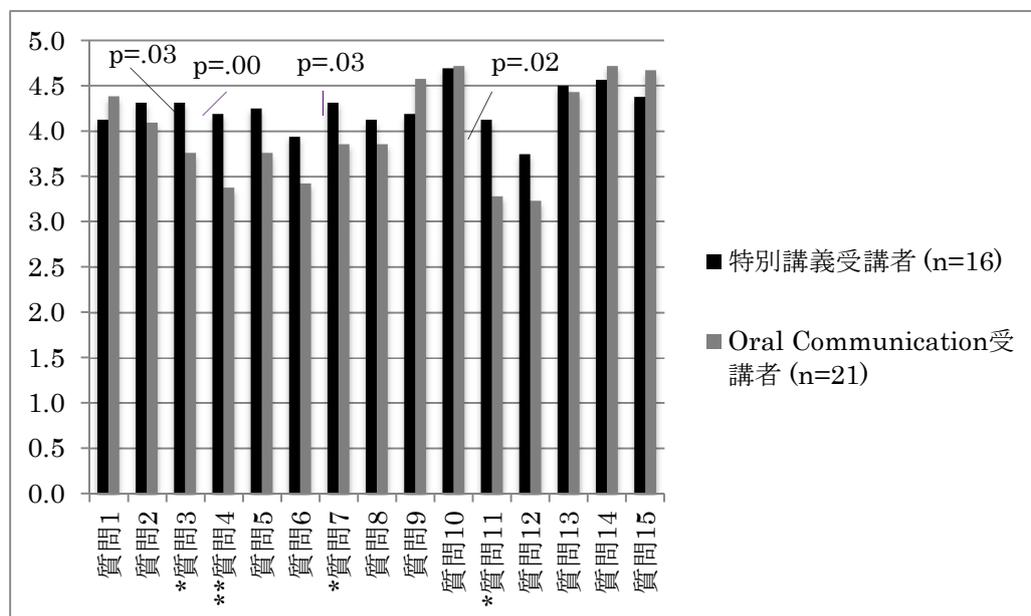


Global Understanding ビデオ会議授業

本 2013 年度において、特に（3）の海外パートナー校の学生とのビデオディスカッション及びチャットの特別講義 I の教育効果を把握するため、受講者にアンケート調査を実施。最後の授業で受講者に次の内容に対する 5 段階評価（「強くそう思う」⇔「全くそう思わない」）でアンケートに回答してもらった。

1. My English communication skills improved in this class. (この授業で自分の英語コミュニケーション力が上がった)
2. I was able to better understand some foreign cultures because of this class. (この授業を受講したため、自分がいくつかの異文化についてよりよく理解できた)
3. I was able to better understand global topics because of this class. (グローバルな話題をよりよく理解できた)
4. I was able to better understand Japanese culture because of this class. (この授業を受講したため、日本の文化をよりよく理解できた)
5. I pay more attention to international news because of this class. (この授業を受講し、国際ニュースに以前より注目するようになった)
6. I am confident using Internet technologies to communicate with people overseas after taking this class. (インターネットによるテクノロジーを使って、海外の人とコミュニケーションができる自身が付いた)
7. I developed an interest in the discussion topics in this class. (この授業のディスカッショントピックに興味をわいた)
8. I feel more confident in discussing topics such as the ones used in this class. (この授業で取り上げられたようなトピックについてディスカッションすることに以前より自身がついた)
9. I learned some useful skills in this class. (この授業では役に立つスキルを学べた)
10. I became more motivated to learn and use English in this class. (この授業では英語を学んだり使ったりするモチベーションが上がった)
11. I made good relationships with people overseas because of this class. (この授業を受講して、海外にいる人とのいい関係ができた)
12. I improved my presentation skills in this class. (この授業では自分のプレゼンテーション力を上げることができた)
13. This class was useful for my future. (この授業は自分の将来に役に立った)
14. I enjoyed this class. (この授業は面白かった・楽しかった)
15. I would be interested in taking a class like this again. (またこのような授業を受講したい)

16名から回答があり、他の授業との比較をするために、全く別の科目である同コースの Oral Communication の全く別の受講者の計 21 名に同じ内容でその授業について調査を行った。両科目・受講者の項目ごと平均結果は次の図の通りであった。



得られたデータを分析するために、アンケート項目ごとに t-検定も行い、図に示されているように全部で4つの項目で有意差が現れた（質問3、質問4、質問7、質問11）。

特別講義 I の平均値が比較群であった Oral Communication の平均を上回る項目：質問2、質問3、質問4、質問5、質問6、質問7、質問8、質問11、質問12、質問13（計11項目）。

比較群であった Oral Communication の平均値が特別講義 I の平均を上回る項目：質問1、質問9、質問10、質問14、質問15（計5項目、どれも有意差なし）。

アンケート項目が特別講義 I の教育効果を計るために作られたため、結果として特別講義 I の回答者の平均評価が Oral Communication 受講者の平均を上回ることが不思議ではない。しかし、殆どの項目の平均が4以上になっているのは、注目すべきである。また、上述のように、データ分析の検定では4つの項目で特別講義 I 受講者の平均と Oral Communication 受講者の平均の間では有意差が得られ、その全てにおいて特別講義 I 受講者の方が高かった。これは、質問3「I was able to better understand global topics because of this class. (グローバルな話題をよりよく理解できた)」、質問4「I was able to better understand Japanese culture because of this class. (この授業を受講したため、日本の文化をよりよく理解できた)」、質問7「I developed an interest in the discussion topics in this class. (この授業のディスカッショントピックに興味があった)」、と質問11「I made good relationships with people overseas because of this class. (この授業を受講して、海外にいる人とい関係ができた)」であった。この科目間の違いは不思議ではない。特別講義 I の授業において、授業の時間中海外の学生と学校生活と教育、家族や社会、伝統文化、人生の意義と信仰、文化的な固定観念や差別問題、その他時事問題などについて、英語でビデオ会議やチャットによるディスカッションをするためである。Oral Communication の受講者は基本的にもっと身近な話題について英語による会話を訓練することが授業の主な活動であり、今回の授業では回答者が「英語に寄るコミュニケーション力が身に付い

た」、「役に立つスキルを学べた」、また「面白かった・楽しかった」と評価した。

特別講義 I の受講者から更に自由にコメントを書いてももらった。これにより、いくつかの問題点も現れた。まずは、時差のため、この授業を週 2 日、1 講時に開講していたため、ハードな科目だというのがあった。また、授業を実施中に機械等に関する問題が急に現れた時もあった。同時に良い授業だったというコメントもあった。7 名からの全ては次の通りであった。

- ・ 「機械が整っていない。以前からある授業だと聞いたが、テクノロジーなどに不備を感じた。学費を払っているのだから機械の予備くらい買って置いてほしい。」
- ・ 「欠席、遅刻が多かった。就活と時期がかぶると辛い。」
- ・ 「改善点：機械のトラブル。」
- ・ 「すごく親近感がわく授業で楽しかった。」
- ・ 「週 2 日、朝の 1 限は就活と重なり厳しかったので、もう少し遅い時間に開講してほしい。」
- ・ 「頭も使うし、難しい授業でしたが、とても楽しかったです。もっとこういう授業があればいいのと思う。」
- ・ 「改善点：Change the time to do class because it' s so early (but I know we can' t change the time!).」

考察及び今後の課題

今回の学部共通特別講義 I の実施は、全体として受講者の学べたこと及び満足度が高かったと言えよう。特にグローバルな話題や日本文化について学べ、これらについて興味がわき、海外の人たちとよい関係ができたようである。これは今後の英語学習へのモチベーションを高めることになるとも考えられ、実際の国際コミュニケーションの機会にもなることにより、更に英語コミュニケーション力が高まる可能性がある。同時にいくつかの問題点が浮かび上がり、機械・テクノロジーに関する問題の解決と普段の開講時間以外の時間設定で開講を検討する必要があることが分かった。また、問 9 に見られる「この授業では役に立つスキルを学べたか」という設問に対する評価は相対的に見て低くはなかったが、学生が「英語コミュニケーション力が十分に身についた」と高く評価できるよう、指導の改善も必要だと考えられる。そして、取り組みの内容とは別の改善点として、特別講義 I のデータ収集と分析、検討等に加えて、ブログとオリジナルサイト活動に関しても、同じようにデータによる点検等がなされる必要がある。従って、今後の課題として次のことが挙げられる。

- ・ 勉強・研究会の開催
- ・ ブログ、オリジナルサイトの更なる活用
- ・ マニュアルの作成
- ・ ビデオ会議授業を実践する特別講義 I の更なる点検と改善

以上